

・採点者の違い：同じ答案、配点は採点者の裁量→点数の大きな違い

私は大学で、教員免許を取得するための授業を担当したことがあります。その時に、実際に採点するということの難しさを大学生に体験してもらうために、**テストの採点実験**をよくしていました。そのやり方はこうです。まず小学校の計算問題の小テストの答案を二つ用意します。これは実際の答案ではなくて私の手作りの答案で、一つは単純な計算問題がよくできている田中君の答案、もう一つは文章題がよくできている鈴木さんの答案です。これをコピーして全員に配ります。そして、時間を決めて両方とも**100点満点**で採点してもらいます。ただし、その時に二つ条件を出します。一つは周囲の学生と相談しないこと、そしてもう一つは、配点は自分で決めるということです。

このようにして採点してもらおうと、まったく同じ答案を全員が採点しているにもかかわらず、その得点にはとても大きな違いが現れるのです。ある学生は鈴木さんよりも田中君のほうが点数が高く、別の学生は逆に田中君よりも鈴木さんのほうが点数が高くなったりします。点数も**40点から80点**ぐらいまで、**採点者の違いによって非常に大きな差**が現れます。どの授業でやっても同じように大きな差異が見られるのです。

このように得点がばらついてしまう理由は、まだ先生になっていない学生たちの採点結果だからだ、と思った人がいるかもしれませんが、それはたぶん違うと思います。なぜなら、この実験は、学生向けの授業だけではなく、小・中学校の現役の先生たち向けの講習会でも行って、やはり同じようなばらつきが確認されているからです。むしろ、この原因は、**採点基準を個人任せにしている**という点にあります。きちんとした採点基準があって、それに統一されていれば得点のばらつきはあまり見られなくなるでしょう。私たちが知っている入学試験や模擬試験などは、むしろ採点基準がしっかり決まっているものですから、算数や数学のような科目、あるいは他の科目でも○×式やマークシート方式のテストであれば、採点者によって点数が極端に違ってくることはありえません。ですから、ここで示した採点実験は現実的ではないようにも見えます。

しかし、○×式の算数のテストであっても、単純な計算問題の配点を高くするか文章題の配点を高くするののかということは、科学的・客観的に決められるものでしょうか。実は、そんなことはまったくないのです。実際には、テストを作成したり使ったりする人のうちの誰かが主観的に重要と思えるほうの配点を多くしたり、少なくしたりしているのが現実なのです。

・著者のテニス経験・・・>あのとときの「実力差」の背後には、奥行きのある社会のしくみがあった

高校三年生の夏には、いくつかの幸運が重なって、地方大会（県総体）で優勝してインターハイ（全国高校総体）に出場しました。一九八四年のことです。結果、全国レベルでは一度も勝つことはなかったのですが、精一杯がんばって到達した自分なりの最高地点で、テニスの世界の頂点がどこにあるかを目の当たりにすることになりました。

じつはこの大会で、シングルス、ダブルス、団体戦と**完全優勝したのは松岡修造さん**、後の有名なプロ・テニスプレイヤーだったのです。あの時、一歳年下の彼が練習している様子を隣のコートで見て（対戦ですらありません！）、私よりもひと回り大きい恵まれた体格もさることながら、動きの俊敏さ、タッチの正確さ、打球の速さに、どのくらいの実力差があるのかを思い知らされました。今は、松岡さんはテレビのバラエティ番組や報道番組、コマーシャルなどへの出演が多くなり、彼のテニスを知らない人も多いと思います。けれども、たいへんな実力と実績の持ち主として、私は今でもリスペクトしています。

この全国大会までの私は、頂点がどのあたりにあるのか視界が効かないなか、目前の上り坂を一步一步登っていくような状態でしたから、無心でテニスに取り組むことができていました。ところが、そのとき目の前の霧が晴れて、頂上が垣間見えたわけです。**その頂上ははるかに遠く、山の中腹あたりを青息吐息で登っている自分に気がついた**のですね。

話が本筋からさらにそれてしまいましたが、松岡さんは、その当時一本一五万円もした、輸入もののグラファイト製のラケットを、三、四本バッグに入れてコートに現れました。世の中のしくみを何も知らない田舎の県立高校生だった私は、「やっぱり、トップレベルの選手となると、すごいもんだな」と純粋に感心したものです。彼が著名な実業家の育ちであることを知ったのは、しばらく経って、彼がツアープロとして世界で活躍しはじめてからのことです。すでに社会学の研究の世界に入っていた私は、**あのとときの「実力差」**の

背後には、奥行きのある社会のしくみがあったことを思い知ったのです。

・社会の実態を教える

大人版の「人生ゲーム」のルー

ルがどのようなものかは、一〇代のうちから少しは知っておかなければなりません。「夢は大きく」などと励まされ続けて、取り返しのつかない困難に直面してから、「種明かし」のように細かいルール説明がなされるのは、アンフェアなやり方です。だから、大人たちは、若者たちが「知らなかった……」とつぶやくことがないように、社会の実態教えることに気を配らなければなりません。

学歴分断線；4年生大学への進路と20歳前後で職業人への進路の2つに分ける（同年代の人口を半分に分ける）

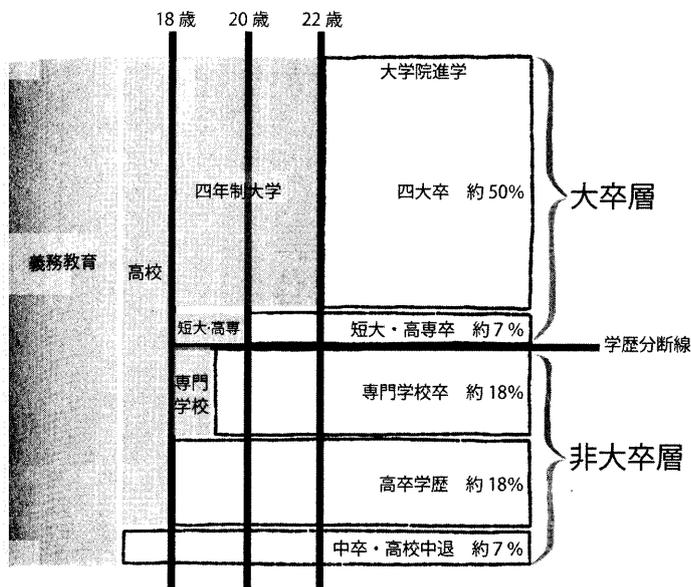


図2 学校から社会への移行

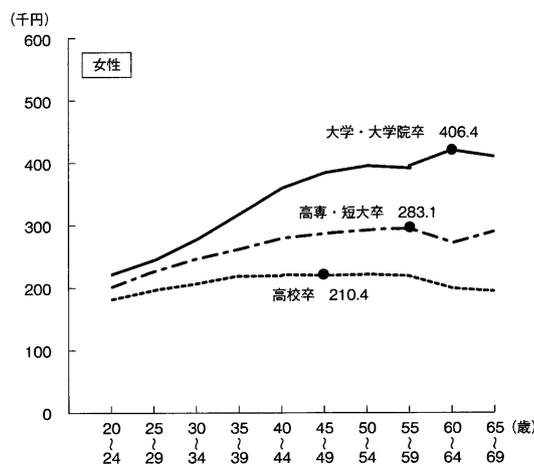
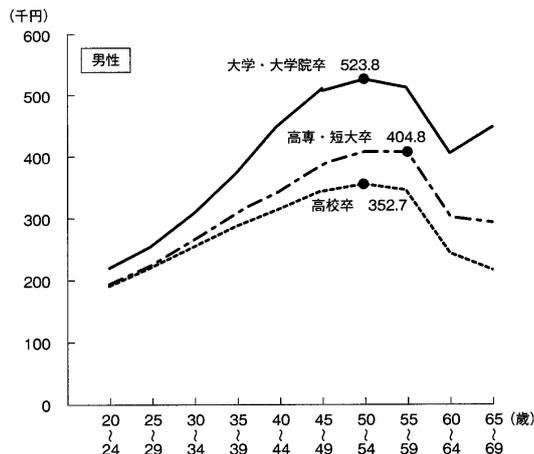


図2 高卒層と大卒層の賃金格差 (賃金構造基本調査概要、厚生労働省2010年)

最初は僅かな差が、だんだん広がっていく。女性の方がフラット。いつの時代のデータなのか…。女性の60-64歳がピークとなっているのは何故。元データ、数字の処理の仕方、厚労省の意図は…。